槿

古井由吉

槿

古井由吉

福武書店

古井由吉（ふるい・よしきち）
一九三七年、東京に生まれる。六二年、東京大学独文科修士課程を修了。七一年、「杏子」により第六十四回芥川賞を受賞。八〇年、「栖」により日本文学大賞を受賞。著書として、「円陣を組む女たち」「行隠れ」「聖」「親」「椋鳥」「古井由吉　作品（全七巻）」などがある。

槿〈あさがお〉

一九八三年六月二五日　第一刷発行
一九八三年七月二五日　第二刷発行

定価一八〇〇円

著　者　古井由吉
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区麹町六―六
〒一〇二　電話（〇三）二三〇―二二三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　図書印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

© Y.Furui 1983
ISBN4-8288-2063-9 C0093

槿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

装丁　菊地信義　函画　天球院「籬に朝顔図」

腹をくだして朝顔の花を眺めた。十歳を越した頃だった。厠の外に咲いていたのではない。

寝冷えをしたのか、明け方近くにうなされて目をひらいた。膝が汗ばんでいた。親たちの床の間から足音を忍ばせ暗い廊下をつたって幾度も厠に通った。ただ渋るばかりになり困りはて長いこと蒲団の中で息をひそめていた。そのうちに夜が白んで疼きも間遠に、心地よい萎えにかわり、うつらとしかけたとき、何を苦しがってか雨戸を一枚だけあけて庭へ出た。

薄霧がこめて地にしっとりと露が降りていた。濡れた草のにおいが線香のにおいと似ていると思った。縁先の鉢植の前に尻を垂れて初めは花を見てもいなかった。ただ腹の内を測っていた。おさまっているのがかえってあやうく感じられた。小児にとって夏場の死はまず腹の内にあった。熱っぽい素肌に朝じめりの涼けがつらいほどに快い。その快さがまた疫痢か何かを誘う、身の毒と戒められていた。

やがてぽっかりと白い、あまりにもみずみずしくて刻々と腐れていくような花の輪に引きこまれた。それだけの記憶だ。しばらくは立ちあがれず、萎えた膝の上に薄くなった腹を押しつけて眺めていた。

1

しかし四十を越した杉尾の眉間の奥に、ある日、あの朝鼻を近づけて嗅いだわけでもない花弁の、色に似あわず青く粘る臭気がひろがった。たちまち身の内に満ちるとやがて草も露も、炊立ての飯も汁も浅漬けも、そして人の肌までも同じ青く粘る精に染まった。粘りながらやはりどこか線香の鋭さをふくんでいた。暗い糞壺の底にほの白く蠢き湧き返っていた、蛆どもの生命まで、思い浮べていた。あの朝、十歳の小児が露に濡れて、自分は生き存えられないような体感を抱えこんで股間には重苦しい力を溜めていた。

「一日の仕事に就く時が切ないのは、年が行くほどに切なくなるのは、これはあたり前の話だが、しかし」杉尾と同年配の男が嘆いた。「毎日毎日、あきもせずに、切ながっているのも子供っぽく感じないか。これも疲れのしるしなんだが。たとえば一日の仕舞いの、歯を磨くとか、寝巻に替えるとか、枕の位置を定めるとか、そんなことを長年の物臭さがいまさら憂鬱に感じるようになると、あんがいこれが、危い兆候なんだそうだ」

「おい、まめにはするもんだな、三白眼の女を知ったよ」また別の友人が燥ぎ出した。「それがまた気のいい、すこぶるつきの呑気な女なんだ。三十も越して御本人が、手前の三白に気がついてないんだよ。よくよく説明してやったら、はあ、そういうのがあるの、あたしはそれなの、と鏡をつくづくのぞきこんで、あら、ほんとだわね、と感心していた。うらやましいような女だよ。遠く近くから眺めて、これでは相手の人たちが、可哀相だったわね、ははは、と鏡に向かって笑いやがった。長年、手前の面を、何、見てきやがったんだ。まわりの者は何も言わなかったのか。こんなこと、あるものか」

騒々しい羨望がやがて憤然としたような口調に終り、友人は目を剝いて黙りこんだ。あんたこそ、ほれ、いま三白になっているではないか、と杉尾はもうすこしで悪戯を仕掛け

そうになった。しかし人生なかばで、俄に三白眼になるというような、あざやかな変貌は実際にないものか、とひそかに考えた。あるいはもともと潜在性の異相で、心身の特別な状態の中でしか顕れないので、本人は日頃鏡をのぞいて知るよしもない。その場の相手も突然の奇怪な印象を、顔の変化に見るとはかぎらない。変貌に驚くには日頃の、年来の面相に疎すぎるということもある。あるいはまた、友人の話す女はそうでもなさそうだが、もしもごく無事平穏な人生だとしたら、おもむろな変貌が五年十年もかかって、すっかり露呈したあとも三年四年と、本人も周囲も何事か起るまで、起ってもまだ、気づかずにいる、ということはあり得る。

「あまりにも明白な肉体の特徴については、馴れ親しんだ者たちは口にしないものでね」あたり前のようなことを杉尾は答えていた。「親兄弟は、そういうことにはお互いに口も重ければ気も重い。あっさり悟らせてくれるのは行きずりの他人の、弥次みたいなものだろう。しかし教えられないという偶然が、人生、長く続くことはある。とくに知らず識らず周囲の異和感に押されて、恥を分けた人間にだけ密着してきたとしたら。徹底して知っていて徹底して黙っているのは、お互いにまるきり気がついていないのと同じ、はたらきを及ぼすことがあるもので」

自分の面相についても、ほんとうのところは、知らないからな、と我身のことを思った。興奮の顔、放心の顔と言わず、まず寝顔に責任が持てるかどうか。人にのぞかれることがあれば、無責任で済むものでもない。しかも寝顔のほうにこそほんとうの面相が、怒りも狂いも、あらわれている気が近頃しきりにする。髭を剃ろうとすると日によって眉間やら口もとやらに皺、というにはまだなまなましい、赤味のかかった、顰(しか)めの跡が見え

る。近年こんなひどい形相をした覚えもない。試みに顔の筋をさまざま歪めてみても、その跡に重なるような皺は、手でも添えなくては作れない。

ひたすらにこやかに、仏のごとく微笑みつづける夢を見て、目をさましたら憤怒の跡が皺に深く刻みこまれていた、というようなことは、あるだろうか。生涯、人には笑みを絶やさずにきたのがやがて口もとの皺に凝って、そこだけあらわに怒り狂っている、というようなことは。それとは逆に、生涯怒りに怒って奥歯もおおかた摩り減った男の、死顔がむやみに剽軽だったり。

「俺はまさか、百年目の男じゃあなし、行きずりの男だから、教えることができたわけだ」友人は苦笑していた。「それに、手前が三白であることを、知らなかったわけでもあるまいよ。よくよく知っていて、長年自分にも人にも黙りこんできたことを、ある日、深い繋りもない他人に、あっさり言われてみる気になることはあるな。ほんとうに知らなかったつもりになって、あら、ほんとだわね、と笑ってみたくなるような。俺は、釣り出されたわけだ」

釣り出された、という言葉に杉尾は目をひらいた。酔寝から覚めた心地で酒場の外の閑散とした裏通りへ耳を澄ました。天から降る遠い車のざわめきを分けて、足音がひとつ遠ざかっていく。悪相がかすかに、目もとに粘りついた。たった半月前の、女の顔が浮ばなかった。忘れたのではない。人中で出会えば一目で見分けられる。たとえ暗闇の中で老若しらじらとひしめく裸女の間からでも、目に入りさえすれば間違うことはあるまい。裸体を見たわけでもないのにこれはまた不思議な確信だが、顔のほうはさしあたり、まるで見えない。しばし待てば浮んできそうな、面立ちのけはいすらない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

何を釣り出されたのでもない。心残りもなければ体臭を残してきた後暗さもない。だいたい、寝てもいない。

しかし妙な話を杉尾は思出した。女は初めて抱かれた男に手を引かれて、三途の川を渡るという。そうだろうか。かりに男が先に往っていて迎えに来るとしても、これがいささか連れ添った仲であれば相応の心の潤みもあるだろうが、あとで何人も男を重ねているとすれば最初はどうせ、ろくな寝方もしていまいから、今生の渡し場で行き逢っていまさらどんな顔を見合わせる。手を携えて渡りながら何を嘆きあったらよい。しかし待てよ、こいつは色恋を往生させるには、なかなか功徳のある話ではないか。

むしろ、こうではあるまいか。女は三途の瀬を渡る時には夫でもなく情人でもなく、初恋の男でも初めての男でも格別の縁でもなく、そういう愛憎はすべて奪われて、たまたま一度だけ行きずりにまじわって倦厭の目をつくづく見かわした、そんな男にふたたび冷い手を引かれて、陰々滅々と濡れて往く。

男のほうも岸まで来て今生の愛憎をすべて失い、しかし最後の報いとして誰かしら、無縁の女の手を引かなくては、みずからも渡れない。

ひょっとして、無縁の男女が偶然の行逢いにより、情の薄いまじわりにより、まだ生きながらに、どんな風にしてか、手を携えて三途の川を渡ってしまう、そしてそれぞれに身だけは日常へもどって、すでに往生しているとも知らずに、別々に生きながらえる、そんなことは、ありはしないか。

「あんたらも、ようやく年が寄りはじめたわね」

小鉢の並ぶ台のむこうから、これも四十を越した女将（おかみ）が前に並ぶ男どもをしげしげと眺

めた。うっすらと笑いながらまた黙りこんで白いことはいまでも白い丸顔を、涼風に吹かれるみたいに、ゆらりゆらりと揺すった。

「おい、俺たちの誰かと、一度ぐらい、寝たことがあるのではないか。もう時効だから、話してしまえ」

誰かが欠伸をついた。杉尾は露じめりの上に尻を低く垂れる心地で、小鉢の上からたじろがぬ笑みが、何とはなしに幽く、またふくらむのを眺めた。

雨の日と晴れの日とでは、死人はどちらが多く出る、と杉尾は右腕をあずけて湿気の浮く真新しい天井を眺めた。上膊が消毒されて看護婦があらためて腕を摑んでから、針が来るまでに、わずかながら間がある。人が紹介状から目をあげてこちらを眺めやり、それから顔を見つめるまでの間と、同じ質のものだ。杉尾自身の場合なら、言葉がようやく決まって、原稿用紙へ筆を突きさすまでの間にあたり、その横顔をはたから見たらさぞや凄いことだろう。このわずかな相間に起る人の視線の、存在の凝縮を杉尾は幼い頃から恐がる癖がある。

通常の注射針の倍ぐらいの太さだろうか。一瞬の痛みが過ぎると全身に脱力感がひろがってくる。人の立ち働く中で靴をはいたまま仰向けに置かれることは、今のところ、この時よりほかにない。五年ほど前に手術をする親類の者に血を提供してから、杉尾は年に二度は車の中で、一度は病院まで足を運んで、献血をするようになっていた。少年の頃の大病の際には人の血を貰ってしのいだことであり、子供らにも、もしものことがあればせめて血を回してやりたい、という殊勝な心もないではないが、それよりも、いずれ避けられ

ぬ自身の大病の、陰惨さを今から小出しに味わっておけば、いざとの時にいささか、心細さが減るのではないか、といういじましい魂胆が忍びこんでいる。しかし病院に来る日はかならず大降りになることが、なにか悪いしるしのように思えた。

やがて天井から目を離してガラスの仕切りの、切符売りの窓口ぐらいの穴からむこうへ差出され生血を採られている自身の腕をつくづく眺めはじめるのも、これも退屈というものか。腕に黄色いテープで固定された太い針から続く透明なビニールの管に、流れるともなく、どす黒いものが満ちている。初めの頃には、注射器で引くかわりに真空装置のようなものがあって一定の力で刻々と吸出しているとなぜだか思込んでいて、きびきびとほかで働く看護婦たちの頑丈そうな身体を目で追いながら、もしも彼女たちが俺の存在を忘れたら、どうする、とそこまで考えるといっそ可笑しくなり、あら、ごめんなさい、すっかりぺそぺそになっちまって、と肩を叩かれてふらつくさまなどを想像した。

何度目かの時に、取扱う看護婦の手もとから、管の先にはやはりビニールの四角い袋がついているだけなのを見て拍子抜けがした。赤くふくらみきって二百CC、一合と少々だという。そのうちにまわりの患者、いや献血者たちの、血の溜まり方に人によって早い遅いがあるのを知って、莫迦げたことに、大の男があまり遅くては恥だぞ、と壮年の虚栄心に捉えられた。女のほうが概して遅いのを見てやはりとも思い、すこし意外な、心外な気もした。

看護婦たちのいる内側を三方からコの字に囲んで寝台は並んでいる。自分の袋はガラスの仕切りを隔てて台のむこうへ垂れるので、他人の血の溜まりぐあいばかりが見える。室内はあくまでも清潔で、地下の陳列室か標本室かに似た静謐に、ホルマリンがごときにお

いも漂って、折しも杉尾ともう一人の献血者が横たわっているだけだった。そちらの台の下に看護婦が屈んで、ほぼふくらんだ赤い袋を両の掌でかるくはさんで、首をかしげるようにしていた。杉尾が室に入ってきた時にはすでに針が腕に刺さっていたのに、どうも血の出がよろしくないらしい。

寝台の上から女は、左腕をガラスの内へあずけて掌をゆっくり結びひらき、看護婦が話しかけている様子もないのに、天井へ向かってしどろもどろに微笑んでいた。これは女性への心づかいか、腰から下に白い布を掛けられてその下で膝をゆるく立て、笑っていると見えたのはこわばりがちの口もとをゆるめているので、つとめて楽にしながら腋から膝へ緊張の走るのが、かすかな布の揺らぎから見て取れた。

それでも杉尾のほうが一足遅れて採血室から出てくると、女は休憩室のソファーに坐り、左腕の脱脂綿を右手でおさえて、献血の後で渡される箱入りのジュースを左の手先につかんでストローで啜っていた。

「いま、何時でしょうか」

斜向かいに腰をおろした杉尾に、薄闇の中からかけるような声でたずねた。同じく腕の綿をおさえる窮屈な手首を杉尾はのぞきこみ、そろそろ五時に近いと答えて、女の手首にも時計のあることに気づいた。女の真向かいの壁にも水晶時計がかかっている。宙へあずけた目の光がやや濁っていた。

こたえましたか、初めてですね、とたずね返そうとして杉尾は目をそむけた。三十過ぎと見えた。少々血を吸われたぐらいで貧血を起すほどの花車さでもない。それよりも杉尾こそ手前の血の質にどういう自信があって、人に提供するのか、と毎度この期になるとお

そわれる疑いにまたおそわれた。この血が他人の内に入ることについて、想像力のはたらかなさには我ながら驚くべきものがある。むしろその想像力の欠落を自分でいささか、楽しんではいないか。

気がつくと、向かいのソファーの上で女は靴を脱いだ両脚を尻の脇に引寄せて横坐りの恰好になり、襟をややひろげ胸で息をついていた。目がひらききり感情の色はなしに潤んでいた。芋でも喰いはじめそうな場違いなくつろぎに、杉尾はちょっと目を瞠ったが、驚きも動かなかった。

やがて女がゆっくりと脚をおろし、遠くを眺めて靴をはき、みぞおちを窪めて腰をあげたとき、杉尾はあらわな、裸体の動作を感じた。女は杉尾のほうへ輪郭の奇妙に鮮明な、遠い記憶像の味のする横顔を向けて、人に見られている意識はなく、ほんのしばらく完全に静止した。それからすっと、歩き出した。

人のつかのまの完全な静止にも、杉尾はかるい恐れを覚える癖がある。そう言えば悪い時に悪い所に立っているなとそう思ったという、失踪者への悔み方があったとかいう。何が悪い時刻で、何が悪い場所なのか、どちらもたまたま呼止めなかった者の、後からの漠とした思合わせなのだろうが、そもそもこういう悔み方があるということが、人間は選りも選って、やりきれぬことを考えるものだ。

しかしわれわれは行きずりの人間ではないか、と我に返って杉尾は綿の上から腕を揉んでいる自分に呆れた。これでは止まりかけた血を絞り出すようなものだ。決まりの十分間も過ぎたので綿を取りのけると、繊維を粘りつけてうっすらと滲む血の跡が塞がっているのか活きているのか、かえってまがまがしいようで見きわめがつかない。流れに運ばれる

ように歩き出した女の腕の、蒼白い内側からも、汚れた綿が一点の血に貼りついて、なかばぶらさがるままに忘れられていた。煙草に火をつけて、さらに数分、杉尾はソファーの上でぐずついていた。

玄関を出ると真直に伸びる道の、もう表通りに近いあたりに、女の背が見えた。棒杭のように立って、風に吹かれていた。歩き出してしまったので、一本道なので、杉尾はいきなり振向かれるのを恐れながらことさら足音を響かせて近づき、女の脇を抜けたかと思ったとき背中に焦りがあらわれ、うしろへ残った腕の、ちょうど採血の跡の上を摑まれた。思わず肘を折り、身をそむけようとすると、凄まじい力が細い指先にこもった。

見ると、目をゆるくつぶり、瞼までも蒼く、髪の硬く立った額をかすかに前後に揺すっていた。顔が気味の悪いほど大きく見えた。貧血ではないという。

そのまま、二人は風の中に立っていた。しばらくして、傘を忘れてきたことに気がついた。

女を背負ったのは、これが初めてか、と杉尾は首をかしげた。記憶のかぎり、たしかに一度もない。腰の抜けた婆さんを負ったこともない。しかし何度も何度も、かかわりのあった女ごとに、果ては持てあつかって、こうして背に運んだような、正体のなくなったのを背にのせてようやくひとりの心地がついたような、そんな気がするのが不思議だった。

腰にぺたりと貼りついた下腹の平たさが、寝るよりもあらわに、あわれに、女を感じさせた。こんなものと、いまさらなぜ、あんなことをしたがる。そう思うのも、すでに夜明けに近いせいか。女の家まで送って、なるようになれば避けぬつもりでもいたのに、車の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com